

「早期胃癌 X 線診断 撮影法と読影の実戦ノート ポイント 100」

社会保険中央総合病院内科部長 浜田 勉 著

放射線科新野医院・東邦大学医療短期大学客員教授

新 野 稔

「胃と腸」1997年8月号(第32巻9号)に掲載された筆者執筆の書評が、編集担当者により無断で書き直され、加筆修正され、原文にない表現も付け加えられ、筆者の校閲・校正を経ないまま印刷出版となつてしまった。しかも、その加筆修正し、書き直した部分が筆者の当初の執筆意図とは反するような表現に変えられ、筆者の文章でなくなり、著者の浜田勉先生に多大なご迷惑がかかる表現であることを、掲載誌を受領して初めて知った次第である。出版社に厳重に抗議するとともに、以下に改めて筆者の書評を掲載する。

順天堂大学の故白壁彦夫教授の最後の高弟であり、わが国を代表する消化器診断学の泰斗の一人である浜田勉博士の227頁の本書は、自らの貴重な体験の結晶として、最新の成果を踏まえ、X線診断技術を見直し、X線診断の一連の思考過程を教授され、基本的なX線診断技術が身につく、大変充実した内容の著書であることにまず驚かされた。

わが国の胃X線診断学は、二重造影法の導入により確立されている。それは粘膜法・二重造影法・充盈法・圧迫法の4法の組み合わせにより、早期胃癌が発見される検査体系である。しかし、著者はX線検査の特性から、多年の実践を踏まえ次のような考えを示されている。

X線検査は受益者一人ひとりの個別的な画像検査であり、最低限のバリウムが付着しなければ像として

成り立たないため、その検査自体の限界を知ることが必要であるとしている。その上、撮影者や診断医の人為的な作業であるため、それらの方々の力量に左右される影響が大きいとしている。それにより、最近の学問的成果と技術的進歩を十分に踏まえ、ルーチン検査のさまざまな問題点を喚起し、具体的な症例を呈示し解説を行っている。ここに本書の第一の特徴があり、これらの教育は一層その重要性を増していることを物語っている。

X線検査は病変を写真に描出しなければ診断を行うことができない原理がある。著者は本書を癌の典型的なX線像を示す教科書としてではなく、また入門書と位置づけないで、ルーチン検査の質的向上をいかにやるか、今までの実践の書とまったく異なる切り口で記述されており、私は迷わず購入し読ませていただいていた。

内容は身近な具体的な症例を呈示し、技術的進歩に対応して、斬新なわかりやすい技法で図示し、逆追跡ができた経過観察例をも含め、自然に論理的な読影法が身につくよう工夫されている。次のような項目より成り立っている。I. 検査についての一般的なチェック事項、II. 撮影法の要点—撮影の順序と注意点、実戦ノート(ポイント100): 薄層像・前壁二重造影像、充満像、二重造影像:

第1斜位、二重造影像: 第2斜位、圧迫法、噴門部、技術編、となっている。

7年前に故白壁彦夫教授より本書のような構成と内容の本の執筆を勧められ、癌を見逃さない日常のX線検査法や、どうすればルーチン検査で癌を見逃さないかを主題として、著者は周到な準備のもとに集大成され、豊富なX線写真とともに、本書を書き上げられていることがわかる。その結実が要を得た100の戦略ポイントにまとめられ、理解を助けるために工夫をこらされたことは読者への大変な親切と言える。

特に最新の成果を加えた基本的な技術の見直しのため、ノート100の主題項目をたて、それに対しポイント100の答として、十分に詳しい記述が行われており大変読み応えがある。このポイントはEvidence-based Medicine(実証に基づいた医療)の成果であり、著者がいう“実戦ノート”の題にふさわしく、ルーチン検査への取組みを明確にしている。これらは単純な技術的解説に留まることなく、診断学的な教科書の内容であることは驚嘆に値するとしか言いようがない。その的確なポイントは注目に値し、才知にとみ、解説にはむだがない。このポイントは診断学の真髄であり、医療の質の向上の基本である。これら一連の思考過程を本書は正しく教えている。

著者は“ルーチン検査時に He を 3 例見つけたら一人前”とし、X 線検査は技術だと言いきっている。著者が言いたいのは、このポイントの知識があってこそ、ルーチン X 線検査が可能であることである。また目の前の X 線写真と本書とをみくらべ、比較することにより、読者の技術評価も可能にしており、技術を一定の水準に導き診断の向上に役にたつ工夫がみられる。

私の同門の葆光会の伝統として“X 線写真に写っていないものは見えない、知識として知っているものは見えない”との教えがある。この本は知識として知っておかねばならぬポイントを教えている。

読者は“はじめに”の項、ついで“あとがき”と、本文の“胃癌の自然史からみた検査の位置づけ”、ならびに“X 線検査は誰が行っても同じか”の個所に詳細に記述された、著者の自らの置かれている立場を見極めた医療観ともいうべきものに目を奪われるはずである。しばしば序文やあとがきを後回しにして本文から読み

始めるものであるが、本書はぜひとも上に述べた項目よりお読みいただきたいのである。なぜならば、この個所には著者がこの本を執筆されるにあたっての考え方が書かれており、読み進めていく道標とも言うべきものがここに記されている。したがって、この本の利用方法を明らかにしているからである。しかし、忙しい人にはまず知りたいところを開いてみるのも良からう。いずれも十分すぎるくらいの知識が得られるであろう。

特に強調したいことは、診断された胃癌が自然史からみて経時的に、また病態像からも、発育進展の経過のどのような病期にあるかを十分に認識し、整理しておくことが必要であるかを教えている。予後を推定するにあたり、胃癌の進展発育の過程を十分に理解することが望ましいためである。視点を変えれば癌病変の存在する場の考え方・意味づけを著者は教えており、また多発胃癌の検索をも怠ってはならないことを願っている。

何よりも読者の技術を整理する上

で必読の書であることは間違いなく、長年消化器診療の第一人者として活動されてきた著者の哲学をも学びとる絶好の書である。かような内容であるため、胃 X 線検査に携わるすべての医師・診療放射線技師の必携の書として、日常臨床の現場で常に手に届くところに置き、折に触れて繙く本としても推奨したい。

● B5 頁 240 図 45 写真 329
カラー写真 3 1997 定価(本体 6,000 円+税) 〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)